

●「SHINWA WALK～伝説そぞ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK²⁶

高砂山車伝説



国重要文化財の本殿

往時を偲ぶ高砂山車も

富部神社は、現存する尾張造りの神社では最古の建造物で、本殿は昭和32年（1957年）に国の重要文化財に指定されています。平成10年（1998年）5月には、平成7年（1995年）1月から始まった本殿の解体修復工事も完了し、創建当時ながらの桃山様式のつややかな外観がよみがえりました。

富部神社の高砂山車は、享保12年（1727年）に製作された山車で、昭和48年（1973年）12月1日に名古屋市文化財に指定されています。型式は、津島型で、祭神を津島神社から分祀していることから、この型を取り入れたと思われます。

巨大な4つの車輪に台座を備え、この上に3層のやぐらを組み上げ、3階部分にさらに展望式屋形をすえ、能人形（能面をついた高砂人形）2体（尉と姥）を飾り、背景には六尺あまりの青松を添えたという、豪壮で華麗な山車です。幕は、羅紗地に金糸で刺繡を施した絢爛豪華な幕で、尾張徳川家の葵紋入りです。

高砂山車は、かつてご当地の祭りでその勢力を競い、



合った「大山2輦（田中、大瀬子）、小山6輦」のうちの小山の一つ。東海道で2輦の山車がすれ違う時などにそれぞれの技を競い合ったといわれています。しかしこれも今は昔物語。残念なことに、高砂山車が、大山・小山の中で現存する唯一の山車となっていました。

往時の祭りは、神楽離子にもぎやかに氏子たちが山車を曳き回し、練り歩いたもので、いなせな祭り男が、氈の上で毬を持って飛び上がりながら、音頭をとった雄姿も語り草となっています。

しかし、現在は、祭り当日に倉庫の扉を開け、由緒ある高砂山車に能人形を飾り付けて展示するのみとなっていました。

現在は3階部分が外されていて、能人形2体は2階部分に飾られます。しかし、車輪の損傷も進行し、山車の移動は不可。それだけに、山車の修復が望まれています。



ゼウスとヘラの息子・アレス

娘・ハルモニアが心の支えに

山車の競い合いの話でしたが、ギリシャ神話で戦いの神といえば、アレスです。珍しくといっては失礼ですが、ゼウスが正妻・ヘラとの間に作った息子です。アレスの双子の妹・エリスも不和の女神と暴れん坊の2人。たまに正妻と作った子供がこれじゃあ、頭を抱えなくなります。

しかも、浮気相手との子供がペルセウス、ヘラクレス、エロス、アポロン、ヘルメス、ミノスなど勇者と賢者揃い。浮気に走るゼウスの気持ちも分かる気がします。

アレスは気性が荒いだけの乱暴者。闘争、戦闘、戦争以外にはこれといった楽しみも持たないため、神々の間でも嫌われ者でした。アレスと親しく付き合ったのは冥界の神・ハadesと双子の妹・エリスぐらいでした。



祭り当日に公開される高砂山車には、能人形が2体（尉と姥）飾られる。

26th Letter

しかし、そんな彼に惚れてしまった女神がいたのです。愛の女神・アフロディーテです。彼女はアレスの獣のような残忍さと激しさに魅了されてしまい、やがて2人は結ばれます。とはいえ、アフロディーテは鍛冶の神・ヘバリストと結婚していて、不倫の恋です。情事を重ねるうち、2人の間にハルモニアが誕生します。

そんな2人の関係を、太陽神・ヘリオスがヘバリストに知らせたため、ヘバリストはアレスとアフロディーテの浮気現場に網を仕掛け、愛し合う2人をあられもない姿のまま捕らえることに成功。2人はそのまま他の神々の前に引き出され、大蛇をかくことになったのです。

そんなやることなしが、ことごとく裏目に出てしまうアレスでしたが、娘であるハルモニアがテバイ王・カドモスの妻になったのがせめてもの救いといえます。しかし、アロディーテを寝取られたヘバリストの呪いにより、テバイ王家の子孫には不幸な出来事が次々に起きることになります。

ちなみにハルモニアは、調和を表す「ハーモニー」の語源です。荒くれ者のアレスの心を調和させる存在だったのかもしれませんね。



※次回は七里の渡し伝説について特集します。お楽しみに。

■ 写真/Kiyoshi K ■ イラスト/Rei
■ 取材文/Icarus